埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

<Education Study Report> The Application of "Common Sense Parenting" to the Teaching of Writing Communication and its Effects

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-09-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 市原, 乃奈
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/349

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

コモンセンス・ペアレンティングを応用した文章表現指導とその効用

市　原　乃　奈

1. はじめに

筆者は2013年度，川口短期大学の「日本語表現法Ⅰ」の講座において，1：スピーチ・プレゼンテーションの方法を学ぼう[1]，2：Common Sense Parenting（以下，CSPとする）を検討しよう，3：人との接し方（挨拶・誉め方・注意の仕方・自己コントロール）を学ぼう，の三点を目標とし，講義を実施した。これは，CSP理論を応用し発展させることで対人コミュニケーション技術の向上やCSPの検討，ロールプレイなどを行う実践的な内容となっている。

本稿は，前期に上記を履修した学生が後期の「日本語表現法Ⅱ」で，設定目標よりも高い成果が見られたことについて報告するもので，あわせてCSPの可能性を検討している。「日本語表現法Ⅰ」の講義の中でCSPプログラムとその検討に充てた時間は6週（6回）である。「日本語表現法Ⅱ」ではCSPの一部のプログラムに焦点を当て，1：日本語の面白さを知ろう，2：考えていることを文字で人に伝えられるようになろう，3：論理的な文章が構成できるようになろう。という目標設定をした，いずれの講義も演習形式をとっている。

本稿を執筆するにあたり，履修者に許可を得て測定結果の開示と報告をするものであることを予め明示しておく。

2. CSPとは[2]

CSPとはCommon Sense Parentingの頭文字をとった呼称で，アメリカで開発された虐待をせずに育児を行うことを目的とした保護者支援の育児プログラムである。特別な新理論を掲げているわけではなく，その名のとおり「Common Sense」が可視化できるようになっている。本稿では，子どもの問題行動に即し，教育的に対処できる技術と虐待予防を目的とした神戸少年の町版CSPを用いている。これは，Burke, R. V., & Herron, R. W.（1996）により纏められた理論に検討を加え，日本文化に沿うように再構築されたものとなっている。

神戸少年の町版 CSP は以下の九つのモジュールから成り立っている。「1：わかりやすいコミュニケーション（行動の観察と表現）／2：良い結果・悪い結果（賞・罰）3：効果的な褒め方／4：予防的教育法／5：問題行動を正す教育法／6：自分自身をコントロールする教育法／7：落ち着くヒント（怒りのコントロール法）／8：子どもの発達と親の期待／9：問題解決技法」これらの中でも，特に大学生が普段の生活の中で対人コミュニケーションスキルとして役に立つと考えられるモジュールは上記の 1〜7 である。講座では 1〜7 を学び，それを日常生活に応用させるならばどんな場面で役立てられるか，様々なパターンを設定してロールプレイの中で技術の習得を図らせた。

3. CSP プログラムを応用し，「理由や根拠」が述べられるスピーチを目指した川口短期大学の講座「日本語表現法Ⅰ」について

右は，筆者が担当した「日本語表現法Ⅰ」のシラバスの抜粋である。第 4 回から第 9 回までが CSP モジュールのプログラム習得に充てた時間であり，第 11 回以降は，その成果を発揮する場として構成した。なお，全履修者は 95 名[3] である。以下，第 4 回から第 12 回まで（第 10 回は除く。13 回以降も 12 回と同様なので除く）の具体的内容を記す。

表 1　2013 年度「日本語表現法Ⅰ」シラバス抜粋

講義回数	内　　容
第 1 回	ガイダンス：口語表現法とは何か／ことばをめぐる状況／ことばが伝えるもの
第 2 回	良い話し手と良い聞き手／各国の挨拶と握手
第 3 回	「話しことば」と「書きことば」／ことばが生み出す人との距離／ことばと対象
第 4 回	CSP① CSP を応用したわかりやすいコミュニケーション
第 5 回	CSP② ことばとこころ〜自分自身をコントロールする方法を知る〜
第 6 回	CSP③ 効果的な誉め方〜習得と基礎〜
第 7 回	CSP④ 効果的な誉め方〜実践と応用〜
第 8 回	CSP⑤ 問題行動への効果的な注意の仕方〜習得と基礎〜
第 9 回	CSP⑥ 問題行動への効果的な注意の仕方〜実践と応用〜
第10回	ビジュアルエイドと修辞法〜香りとことばのコミュニケーション〜
第11回	批評と評価／発表準備
第12回	とっておきの情報を紹介する（発表）
第13回	とっておきの情報を紹介する（発表）
第14回	忘れられない思い出を語る（発表）
第15回	忘れられない思い出を語る（発表）／まとめ

〈第 4 回〉

目標：コミュニケーションをとる際の環境と相手への配慮を認識する。

- 二人一組になり，よい聞き手と悪い聞き手を互いに演じ，1 分間の時間の経過の感覚が異なることを体感させる。
- 二人一組になり，向かい合う。近距離（体が触れ合いそうなくらい）から遠距離（教室の端から端）まで何段階かに分け，15 秒間会話する。どの距離が好ましいか認識させる。
- 二人一組になり，一方は立ち，一方は座って 15 秒間話を続ける。互いにどんな気持ちになるのか認識させる。

- 二人一組になり，背中合わせで立ち，15 秒間会話する。その後，二人の距離を徐々に離していく。うまくコミュニケーションできたか考えさせる。
- 二人一組になり，一人は前を向き，もう一人は前の人の背中を見るように座り，15 秒間話会話する。互いがどんな気持ちになるのか認識させる。
- 会話をする際，教室の明るさによって二人の距離はどのようになるか変化を体感させる。また，声の大きさにはどんな変化が見られたかも体感させる。

目標：聴衆分析をし，聞き手が話し手から何を言われているか，明確に理解できる表現で伝達しよう。

- 相手の行動を抽象的な言葉を使わずに，具体的に表現する方法を身につける。
- 聴衆分析し，相手に理解してもらえるような表現を工夫する。
- 「しっかり」「ちゃんと」などの曖昧な表現は使わず，5Ｗ1Ｈを適宜用いて明確に話す。

【設定：3 歳から小学校低学年】

曖昧な表現）「そうやって，遊ばないでちょうだい。ご飯を無駄にしないで。」

わかりやすい表現）「手で食べたり，ご飯をぐちゃぐちゃしてお砂遊びみたいにしたりするのはよくないね。お箸を使って，最後まで頑張って食べようね。」

【応用：上司（先輩）から部下（後輩）】

曖昧な表現）「プレゼン，よかったよ。お見事。お見事。」

わかりやすい表現）「今日のプレゼンわかりやすかった。今時の大学生がどんな芸能人に興味を持っているかわかったし，リサーチの仕方もよく頑張ったよな。そのアイディア，どこで見つけたの？　パワーポイントの構成も見やすかったよ。」

この目標への取り組みは，コミュニケーションでは物理的な人との距離・明るさ・ノイズの介入などの環境・年齢にも左右されやすいことを認識させた。聞き返し，問い正しの悪循環は互いにストレスが溜まる行為である。必要な情報をわかりやすく説明し，「確認」と「質問」を織り交ぜるなどの相互コミュニケーションが大切である。

学生は 4〜5 人グループを作り，その中を二組に分け，一組が様々な役柄を演じ，ロールプレイに励む。もう一組はそのロールプレイを観察し，曖昧な表現・目線・相手との距離をチェックする形式をとった。一つのロールプレイが終わるたび，グループごとに問題点等を検討させた。筆者は必ず各グループに 2 回参加しながら，常に教室内を歩き回っている状態で講義を進めた。

〈第 5 回〉

目標：相手が感情的になって，反抗したり，泣いたり，無視したりするといった，互いの緊張感が高まる場面での対処法を身に付ける。怒りをコントロールし，落ち着きを維持する方法を身に付ける。

- 自分はどんな時に怒りが込み上げてくるのか分析する。（イラッとすることも分析する。）
- 自分はどんなことがきっかけとなって，我慢していた怒りが爆発するのか分析する。（キレるポイントを探る。）
- 自分はどんなことをすれば落ち着くか／気分転換できるか分析する。

人とのコミュニケーションの中には良いことばかりではなく，イライラしたり，怒りが込み上げてきたりすることもしばしばある。その際，自分自身をコントロールして接していくことが人間関係を円滑にする一つの手段である。これを行うためには，2 段階で，7 項目のプロセスを経る必要がある。第 1 ステップでは，「①まず，自分自身が落ち着く　②相手が落ち着くためにはどうしたらよいか指示を与える　③自分と相手が落ち着くまでの時間をとる」までを行う。第 2 ステップでは，「④共感的表現を述べる（「認知的共感」）　⑤現状を説明する　⑥今後，落ち着くためにはどうすればよいか相手にヒントを与える　⑦相手に落ち着く方法を練習させる」このようなプロセスを学ばせた。ここで認識することは，自分は何に怒りを覚え，何をすれば落ち着くのか，「自分のキレるポイント」を知るということである。

〈第 6 回〉

目標：相手の行った行動に対し，「よい行動は増やす」「悪い行動は減らす」ようにするための対応を身に付ける。

- わかりやすいコミュニケーションを用いる
- 良い行動を増進させる相手にとっての良い結果（賞・よかったと思わせる体験）を分析し，用いる。
- 悪い結果を減少させる相手にとっての悪い結果（罰・しまったと思わせる体験）を分析し，用いる。
- 「もう一度させる方法」「元に戻させる方法」も問題行動を減少させるための重要な方法であることを認識する。
- 自分の損得に左右されるのではなく，相手の立場に立った損得を考える。
- 効果的な結果の特徴を知り，年齢的な問題・持続性・即時性・重要性・大きさなど，聴衆分析を行い，用いる。

【設定：宿題を帰宅してすぐに済ませた子どもに対して】

適切でない例）遊ぶ前に宿題をやって偉かったね。そういうことができる子はこれから中学生・高校生・それからいい大学に入って，就職先も一流企業，幸せな家庭を築いて，一生幸せになれるぞ。→「誉める」という良い結果を与えたが，行動に対する成果が表れるまでの時間や，親の考え方に問題がある例。

適切な例）遊ぶ前に宿題をやって偉かったね。これで夜になって焦ってする心配がなくなったね。じゃあ，6時のチャイムがなるまで遊んできていいよ。→子どもが好むことを良い結果として与えた例。

【応用：講義中私語が多いクラスに対して】

適切でない例）うるさい，静かに。静かに。……

適切な例）静かにしなさい。今からこちらで席を決めます。決めたところに着席しなさい。今は講義中です。わざわざここに来てまでおしゃべりする必要はありません。講義に参加するより，おしゃべりしたい人はどうぞ今ここから出て行ってください。講義を聞きたい人には迷惑ですし，聞きたくない人にはこの時間は無駄ですから。この状態が続くようでしたら，いつも指定席にします。→指定席という学生にとって，嫌なことを悪い結果として用いた例。

ロールプレイをさせるまでに検討した例は，子どもとのコミュニケーションの例ではなく，日々筆者自身が学生に与えている良い結果と悪い結果を紹介していった。

〈**第7回**〉

目標：年齢を考慮し相手の未来を考えて，効果的に誉める方法を身に付ける。（誉めたことで，その行動が継続，またはさらに良くなるように。）

- わかりやすいコミュニケーションと良い結果・悪い結果を用いる。
- 相手の立場に立った理由と自分の立場から見た理由を明確に述べることの重要性を学ぶ。
- 行動が起こった直後に一貫して誉める。
- 行動は小さなステップをとらえて誉める。

1）賛美を与える	
・笑顔や誉め言葉	「感心だわ，しょう」
・頭をなでるなど	
2）望ましい行動を表現する	
・子どもが行った望ましい行動が何かということをわかりやすく説明する	「テレビを見る前に宿題をすませたのね」
3）理由を述べる	
・なぜ，その行動が望ましいのかを説明する	「これで夜遅くに宿題をしなくても済むわね」
4）子どもの関心に応じて誉めるだけで十分なことが多い	
・今後につながる「良い結果（賞）」を与える	「今夜は夜9時まで，テレビを見てもいいわよ」

上記は，野口啓示（2009）に記載のある段階を踏んだ誉め方をまとめたものである。本講座のロールプレイでは，バイト先での出来事，上司が部下を誉める，恋人を誉めるなど，学生自身の現在と社会人になった未来を想定したものを多く行った。学生に一番時間をかけさせた項目は，上記「3）理由を述べる」というステップである。ロールプレイの際，納得のいかない場合や不明確な理由に関しては「なぜ？」をくり返して，明確な根拠が示されるまで徹底するよう指導した。その際，「なぜなぜ分析」を行い，「なぜ？」を最低５回はくり返し，理由や根拠が明示できるように取り組ませた。図１は，「なぜなぜ分析」を履修者全員で検討した際のパワーポイントである。パワーポイントは，学生があげた「良い事象」をスタートとし，「なぜ良いの？」に対する答えが履修者側から出るごとに，筆者がその場で打ち込んでいった。筆者が用いている「なぜなぜ分析」は「トヨタ式５Ｗ１Ｈ」に由来する。

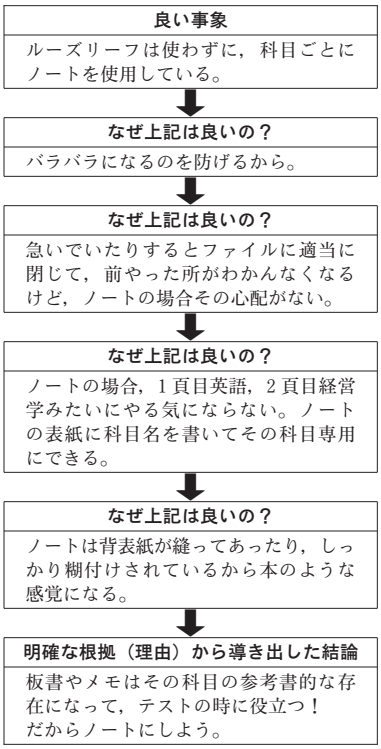


図１　履修者全員で行った「なぜなぜ分析」

〈**第８回**〉

目標：何かが起きる前に，予め自然に相手に言い聞かせる方法を身に付ける。相手に不快感を与えず注意助言する方法を身に付ける。

子どもにしてほしいことを説明する際，子どもの側に立った理由が必要である。例えば，親が「ごはんできたよ。」と外にいる子どもを呼んだら，聞こえた合図に「わかった。」と言ってほしい。そして，まっすぐ帰ってきてほしい。それができると，ごはんの後も遊べるチャンスが増える。と説明する。それに続けて「一度やってみよう。呼ぶからね，なんて言ってどうするか見せてね。（練習）よくできた！　呼んだら返事。帰ってきてね。」と言う。ここでのポイントは「練習」させ，何をすべきか「確認」する段階が踏まれることである。講義の中では応用として「恋人を自分の親に紹介する」という設定でロールプレイを行った。年齢に応じた確認方法の検討が必要だと感じられた。その後，「問題行動を正す教育法」を練習させた。以下にステップをまとめたものを示す。

1）問題行動をやめさせる。

- 穏やかに線を引く
- 分かりやすく指示を与える
- 何が起こっているのかを説明する
- 共感的表現

「まい，テレビを消しなさい。マイがテレビを好きのは知ってるよ。でも，今は宿題をする時間だろ。」

2）悪い結果を与える

- 問題行動に関係したものがよい
- 子どもの年齢と能力に合ったもの
- 叩く以外で，子どもの「しまった体験」を導くもの

「宿題をしないでテレビをみていたから，宿題をした後もテレビはなしだよ。」

3）子どもに対してしてほしいことを説明する

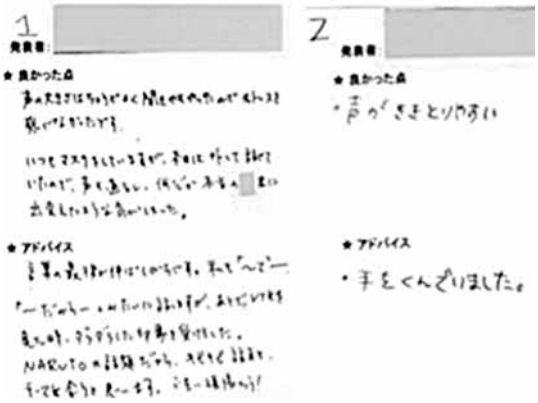
- 具体的に取るべき行動を説明する

「宿題を済ませてから遊ぶのが約束だ。もし何かしたいことがあるなら，早く宿題を終えれば，すぐにまた遊べるのだから。」

市原乃奈（2012）では，認知的共感と情動的共感の相互作用について触れ，これらが賛美や注意に必須であることを確認した。そのことを受け，川口短期大学の「日本語表現法Ⅰ」の講義構成は，CSP を学んだ後にスピーチという運びとなっている。これは，スピーチの際，コメント用紙[4] の作成に効果が出ると目論んでのことである。「共感」は「理解」に繋がり，やがては「信頼」に至る。単純に考えれば，誉める・注意・助言等，明確な根拠を示すことで指摘された側は納得するはずである。しかし，これを適確に述べれば述べるほど，指摘された側は指摘を無視できない状況に追い込まれることにもなるのである。聴衆分析を入念に行わなければ好意的な賛美や助言も相手の逃げ道を塞ぐこととなり，対人関係の崩壊に繋がる恐れがある。それを防ぐのが「共感」である。スピーチでは，CSP のモジュールを留意することで，「主題」「立場」「理由」「結論」が最低限組み込めているように感じた。履修者は，スピーチの素材を決めると，「なぜなぜ分析」を自発的に開始する習慣が身についたようである。

資料 1[5] は，今回の講義で履修者の中から無作為に選んだ学生 A のレポートのコメント用紙の添付部分である。レポートの内容は，自分に書かれたコメントシートを全て分析し，努力した点・これからも継続してきたい点・改善すべき点を記すというものと，コメント用紙の中で印象が良かったものとそうでないものを 3 枚ずつあげ，その理由を記すというものである。学生 A は自らコメントシートに番号を付し，1 は最良のもの，2 は最悪のものとして分類している。本人の記述をそのまま引用すると，「良いものは，聞いている人の体験や周りの雰囲気が書いてあった。一緒に頑張ろう系のことが書いてあって，なるほどなぁと思った。そして，やばいこともどうしてそう感じるのかがいっぱい書かれていた。次からは書かれたことを直していきたい。でも，悪いのは欠点を言いっぱなしで，だからなんなの？　と言い返したくなった。短

資料 1　川口短期大学の学生が記入した学生 A に対するコメントシート



すぎて意味不明だし，真剣に聞いてなくて適当に書かれてる感じがしてウザイと思った。」と記されていた。回収した履修者のレポートには，概ね自分のコメントシートの書き方は棚に上げ，共感と明確な理由の記載があるコメントを求める者が多かった。この結果は，市原乃奈（2012）と同様であった。

4. 文章表現に派生したコモンセンス・ペアレンティングの効用

ここでは「日本語表現法Ⅱ」の「文章を書き，人に伝達する」という目標達成にもその効用が派生したことを報告する。

CSP プログラムは，前述したように「当たり前」のことを小ステップで確認し，実行していく話し手のためのプログラムであるため，虐待防止だけに有効的なものではない。CSP の核には，「自分の気持ちを相手に伝える／相手の気持ちを推測する・汲み取る」また，「自分のしている・しようとしている行動を説明する／相手のしている・しようとしている行動を説明する」そして「自分の気持ちを確認する・コントロールする／相手の気持ちを確認する・コントロールする」があると解する。この作業は，自問自答を繰り返す作業である。また，CSP の各モジュールを用いた実際の発言を文字化すると「事象→主張・意見→根拠→確認・念押し→良い結果（賞）／悪い結果（罰）」という仕組みになっていることもわかる。

「日本語表現法Ⅱ」では，CSP で学んだモジュールを様々な場面に応用し，発言内容を全て文字化することに努めた。会話を可視化させたのである。すると，モジュール内のプログラムにはいつも「「理由」を説明する」という作業があることに気づく。会話では，両者の間に齟齬が生じても，同じ空間内で確認し合いながら会話続行が可能である。そして，ノンバーバルコミュニケーションよりも互いの心理の読み込みが活発である。しかし文章ではそうはいかない。第一段階として読みやすさ（視覚）・わかりやすさ・面白さが要求される。視覚的に困難なものや読み手を無視した自己中心的なものも同様である。読者分析が必須である。さらに，期待を持たせることも重要である。CSP でも，「未来につながる賞罰」や「問題を修正すればあなたはこのようになれる可能性がある」ということを責任を持って語りかける必要があった。

履修者には，CSP モジュール「良い結果・悪い結果（賞・罰）」で 2 題・「効果的な誉め方」で 2 題・「予防的教育法」で 2 題をプログラムに則って，大人編・子ども編各 1 題ずつ実施させた。課題実施中のロールプレイは発言内容を全て文字化させた。発言内容に矛盾はないか，相手からツッコミが入れられるような部分はないか「なぜなぜ分析」を各自で行わせた。これらの作業を 3 回に渡って取り組ませた後，動物愛護週間に因んで制作された『時代のカルテ命の現場から』[6] を視聴し意見文を書かせた。視聴内容は，「①深夜眠れぬ子犬たち（ペットショップ深夜営業の

実態），②パピーミル（悪質業者の闇），③すべての犬たちに安息の日々を（殺処分の現実）」である。図 2 は，CSP のプログラム習得過程の作業と意見文を作成する手順を対応させた図である。書き上がった意見文はランダムに履修者に配布され，読み手は手元に来たものを熟考し，疑問点を付箋で貼るという作業を一人三人分行った。付箋は，不明瞭で貼られる部分とそれぞれの知識や興味によって貼られる部分に分かれた。その指摘に基づき，修正と加筆を行い，意見文を完成させた。筆者は，この作業を通し，CSP がクリティカルシンキングとロジカルライティングを兼ね備えたプログラムになっていることに気付いた。

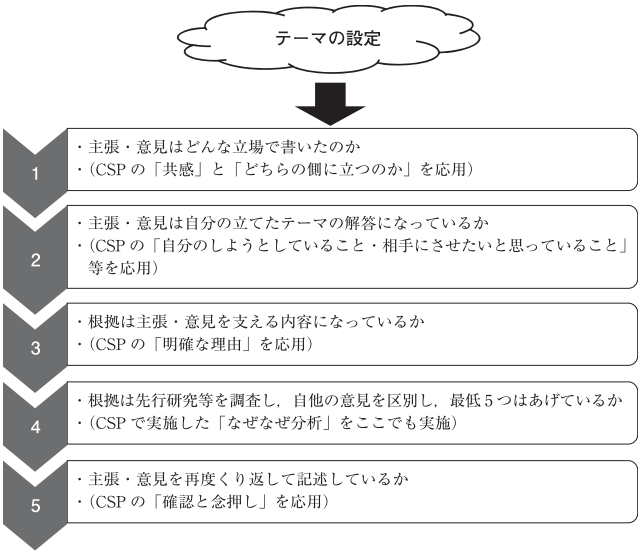


図 2　CSP プログラム習得過程作業と意見文作成手順の対応

5. ま と め

先にも述べたが，CSP モジュールとその中の常識的でかつ細かな確認作業を伴うステップは，「自分に問いかけるという思考」と「自分の考えを落ち着いて整理する冷静さ」を培うことができたと解する。CSP は「常識的で当たり前」のことを一つずつ確認していく作業と捉えてもいい。履修者は，指示しなくとも「なぜなぜ分析」を自主的に行っている。その姿勢は，問題を正確に把握する力・議論に上がらない，見えない部分の互いの考えを読み込む力・根拠や理由として妥当かを判断する力の向上として表出している。当初の目標は，意見文を書くといっても感想文との違いに気づき，自他の意見を区別して書くことだった。しかし，問題の設定・意見・主張の多角的な考察と念押しをくり返し交え，論理的文章の構築ができるようになりつつある履修者が多く出た。CSP はロジカルライティングへの基盤になったと考えられる。

今回は，市原乃奈（2012）で CSP が齎した効用を実際に運用してみるという試みだったが，更なる効用と課題も見つかった。市原（2012）では，認知言語学・認知コミュニケーション論から母親が子供に向かう場合，代名詞で指示するか名を呼ぶかで効果が異なるか否かが未解決であった。このことは，CSP プログラムの実践と，今まで筆者が学んできた日本語学研究の接点として，自身の研究課題としなければならない部分なのである。だが，本稿で紹介したように，この

システムの適用も試行の段階であり，「認知と言語」の関係も様々な面から研究が進められており，これから体系化されていく途上と思われる。そのため未だ問題提起の域を出ていない。川口短期大学では履修者が好む呼称で呼び合う教室とした。同様の講義を行った武蔵野美術大学では全員一律「苗字＋さん」で通した。そうしたところ，前者の方が履修者同士また教員との関係も良い意味で縮まった。しかし，このようなクラス運営をすることは組織の理解も必要である。

筆者はCSPトレーナーであるため，この理論の多様性を検討している。今回の大学生を対象とした分析で，CSPが虐待防止の子育て支援プログラムというだけではなく，それ以外の場面での応用とその効用が確認できた(7)。筆者は，今，心のケアの問題にも取り組んでいる。ここには介護の問題等も絡んでいる。現在，CSPと合わせて検討しているものにユマニチュードがある。これは認知症ケアの技術のステップを記したものであるが，CSPと同様，common senseを可視化したものである。当たり前のことは日々の生活の中で疎かにしがちなことでもある。確認し徹底させていくことで，様々な効用が生まれることを留意していきたい。ただし，マニュアルとしてこれらが独り歩きするのではなく，心で接することを忘れてはならない。

《注》

（1） 桜美林大学「口語表現Ⅰ」の実践結果に学ぶところが大きい。筆者2011年まで左記大学非常勤講師。
（2） CSPの詳細および，神戸少年の町CSPの普及状況に関しては市原乃奈（2012）を参照されたい。
（3）「日本語表現法Ⅰ」は2クラスに分かれており，Aクラスが45名，Bクラスが54名である。第5回までにドロップアウトしたBクラスの4名については検討に含めていない。
（4） 聞き手が話し手のスピーチの様子を評価する用紙。資料1として掲載。
（5） コメントシートの記述で個人を特定できてしまう部分は付箋を貼って隠してある。
（6） 2009年9月21日〜23日にフジテレビNEWS JAPANで放映された滝川クリステル取材の記録。
（7） CSPは大学の基盤教育でもコミュニケーションコンピテンスの面だけではなく，クリティカルシンキングからロジカルライティングへの橋渡しとなるようなスキル養成に効果を発揮できた。CSPはレポート作成・学術論文制作・就職活動等，様々な面で応用できると思われる。筆者は，CSPを大学教育に取り込むことを推奨しているわけではない。CSPの可能性と個人的実践に有効的であったことを述べるにとどまるものである。

参考文献

Burke, R. V., & Herron, R. W. (1996). Common sense parenting. Boys Town, NE: Boys Town Press.
市原乃奈（2012）『コモンセンス・ペアレンティングと表現指導 ── 大学生指導への応用と認知分析をめぐって ──』明治大学日本文学 第38号（明治大学日本文学研究会），P（77）36–P（97）56
野口啓二（2009）『神戸少年の町版　コモンセンス・ペアレンティング　トレーニングマニュアル ── 普及版 ── 改訂4版』および付属DVD

協力
川口短期大学2013年度前期「日本語表現法Ⅰ」履修者95名
川口短期大学2013年度後期「日本語表現法Ⅱ（論作文技法）」履修者21名

（提出日　2014年9月23日）